

研究成果報告書

1. 研究概要

・研究テーマ

一人一人の個に応じた学びを支える「緩やかな協働性」の創り手となる児童の育成とカリキュラムデザインの研究

名古屋市の実証研究協力校では、週に5～10時間程度、児童が「いつ学ぶか」「何を学ぶか」「どこで学ぶか」「どのように学ぶか」を自分で選択する複数教科同時進行型の自由進度学習に取り組んでいる。

自由進度学習は、緩やかな協働性を基盤としつつ、学習者一人一人の学びにおける自己決定の機会を最大化する。より具体的には、誰もが、必要な時に、必要な仲間と協力できるという安心感を土台にしつつ、自分の興味関心や得意を生かした、また、苦手を補うような学びの内容や方法が許容されるということであり、これは、結果として、特異な才能のある子どもたちを含む全ての児童生徒への包摂性を高めることになる。

自由進度学習では子どもたちが互いに高め合い補い合いながら自立解決型の学びを進めていくのであり、学びの基盤である、全ての子どもが互いに尊重され、誰もが、必要な時に、必要な仲間と協力できる「緩やかな協働性」が、最も重要な要因であると考え。そこで、本研究では、子どもたちが自律した学び手となるために、子どもたち自身が「緩やかな協働性」の創り手となることを目指し、実証研究協力校において取り組むイエナプラン教育の活動（対話、遊び等）やアドベンチャープログラムを参考とした学級づくりの実践の更なる改善・充実を進める。またカリキュラムデザインとして、児童の積み重ねた経験や学級の状況との関係における自由進度学習の進め方や、既存の学習内容では満足できない児童への発展的な学びを導くインストラクションやドライビングクエスチョン（原動力となる問い）の在り方、学級づくりの実践をカリキュラム上において整理することに取り組むものである。

2. 研究内容

（1）研究課題

（研究領域1）学校内での取組に関すること

- ☐ a 単元内自由進度学習や異年齢集団による学習、理解の状況に応じた課題の設定など、特異な才能のある児童生徒をはじめ子供の関心等に合った授業や学習活動の在り方
- ☒ b 特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方
- ☐ c 児童生徒が普段過ごす教室や学校内の他の教室等、指導・支援に取り組むための多様な学びの場の設定や連携の在り方や、過ごしやすい居場所としての環境整備・人的サポート等の在り方
- ☐ d 特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方
- ☐ e 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応の在り方

（研究領域 2）学校と学校外との連携に関すること

- ☐ f 学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導・支援の方法
- ☐ g 特異な才能のある児童生徒に支援を提供するための学校外の機関の在り方や、その機関と連携して学習を行う際の学習状況の把握や学習評価の在り方
- ☐ h 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応

（研究領域 3）児童生徒を取り巻く環境の整備に関すること

- ☐ i 教職員への研修の在り方や、保護者、地域社会の理解の醸成の在り方
- ☐ j 各主体が保有する情報集約や、主体間の情報連携・共有の在り方
- ☐ k 児童生徒の機微な情報の共有の在り方、進学時の情報の引き継ぎなど学校段階間の連携の在り方

（2）研究における取組

<内容>

ア 学級づくりの実践

- ・学級づくりの実践自体は学校全体で取り組むものの、研究の主たる対象としては低学年、高学年における代表学級（計 2 学級）とし、年間を通じた実践事例の蓄積・整理を行うとともに、当該学級と数名の抽出児童の学び方等の変容等について観察・記録を行った。
- ・学級づくりの実践については、当初、チームビルディングの活動を中心に行いつつ、徐々にチームビルディングで取り組んだことを日常の学びに生かす活動にシフトし、最終的には児童が学級づくりの活動の創り手となることを目指した。
- ・児童の積み重ねた経験や学級の状況に応じて、自由進度学習における児童の選択・決定できる領域を拡張し、当初「1 時限」の中での自由進度学習から、徐々に「数時限」「1 教科」「2 教科同時進行」「複数教科同時進行」の自由進度学習にシフトしていった。
- ・児童質問紙において、実践校が学校全体として高い結果を残していることを成果と捉え、令和 6 年度についても引き続き学級づくりの実践に取り組んだ。その中で「本物の学び」に該当する「状況に埋め込まれた学習」と「自己決定に貫かれた学習」の構造や関係を明らかにするとともに、その内容について検証分析し、研修や実践に繋げていった。

イ 教職員に対する研修

- ・教職員の資質・能力の向上と学級づくりの実践の改善・充実に向け、以下の校内研修を実施した。

<令和 6 年度校内研修>

区分	時期	内容	講師
1	4 月	やってみよう！クラス会議	愛知教育大学 非常勤講師 深見太一氏
2	5 月	ニューロダイバーシティについて	一般社団法人子ども・青少年育成支援協会 代表理事 村中直人氏
3	10 月	アドベンチャー教育を日常へ	軽井沢風越学園 前副校長 甲斐崎博史氏
4	1 月	体験しよう！ワールドオリエンテーションの進め方	大日向小学校 教務主任 秋山真一郎氏

- ・代表学級の担任教師について、国内先進校の視察研修（6月、10月）を実施した。
- ・新しい学校づくり推進室の指導主事が、週1回程度、代表学級の担任教師の実践に対する指導・支援を行った。
- ・運営指導委員会とは別に、年3回程度、学校法人茂来学園大日向小学校教頭の青山氏に來校いただき、代表学級の参観後、指導・助言をいただいた。

ウ 効果検証

- ・代表学級の学級全体及び抽出児童についてアンケートの変容等により実証的に効果検証を行った。
- ・児童の変容に係る効果検証に関しては、運営指導委員会とは別に、（一社）School Transformation Networking 代表理事の山口氏に依頼した。

<経過>

月	取組内容			
4月	学級づくりの実践 事例の蓄積・整理	校内研修①		
5月		校内研修②		
6月		視察研修①		
7月			アンケート①	運営指導委員会①
8月				
9月				
10月		視察研修② 校内研修③		
11月				
12月				運営指導委員会②
1月		校内研修④	アンケート②	運営指導委員会③
2月				
3月				

エ 運営指導委員会

研究への指導・助言をいただくため、運営指導委員会を3回開催した。

【運営指導委員会の構成】

区分	氏 名	所属・役職等
1	苫野 一徳	熊本大学教育学部准教授
2	山口 裕也	（一社）School Transformation Networking代表理事
3	久保 礼子	学校法人茂来学園大日向小学校・中学校長
4	青山 光一	学校法人茂来学園大日向小学校教頭

3. 実証研究の成果や課題

<成果>

イエナプラン教育の活動（対話、遊び等）やアドベンチャープログラムを参考とした学級づくりの実践や自由進度学習を中心とした授業実践によって、子どもたちの自己選択の機会が最大化され、自己決定で貫徹するという「まず自由ありき」※1の環境構成や条件設定がなされていた。そのため、子どもたちは臆することなく自分らしさを発露することができるようになった。その上で、教員による対話の促しや足場かけが行われることで、互いの自分らしさを認め合うことができるようになり、子どもたちが学級内において「緩やかな協働性」を自ら創って

いくことができていることが分かった。

この成果を横展開できるようにまとめられたものが、「多様性を包摂する学校教育の在り方モデル」※₂である。このモデルを参考にしながら学級経営を行っていくことで、全ての子が自分らしさを発露できることにつながると考える。

<課題>

自由進度学習に代表されるような個別最適な学びが孤立した学び、「場は共にしていても、思考は共にしていない」状況となっていることが研究協力校でも見られたことが課題である。その課題を克服するための一つの方策として、研究協力校の授業実践の好事例から、「学習指導において個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を成立させる3条件」※₃を明らかにすることはできた。その3条件を意識しながら学習指導を実践し、積み重ねていくことで、全国の自治体と一緒に解決していくべき課題だと考える。

4. 参考資料

- 運営指導委員会議事録
- 代表学級の実践記録
- 多様性を包摂する学校教育の在り方モデル ※₁※₂
- 学習指導において個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を成立させる3条件 ※₃